

<研究ノート>

## モンゴル語文法研究ノート(2) Some notes on Mongolian grammar 2

風間 伸次郎  
Shinjiro Kazama

東京外国語大学大学院総合国際学研究院  
Tokyo University of Foreign Studies

**要旨:** 本稿は主に Janhunen (2012) の記述や例文をコンサルタントと検討する中で見出された問題点や、その問題に関するコンサルタントの内省を記しておこうとするものである。必要に応じて若干のコーパス調査も行う。

**Abstract:** This paper mainly describes the problems found while discussing the descriptions and example sentences of Janhunen (2012) with the native consultants, and the introspection of the consultants regarding the problems. If necessary, some surveys by corpus will be conducted.

**キーワード:** ハルハ・モンゴル語, 内省, コーパス, 内モンゴルのモンゴル語, 聞き出し

**Keywords:** Khalkha Mongolian, introspection, corpus, Mongolian dialects in Inner Mongolia, elicitation

### 1. はじめに

本稿では Janhunen (2012) の文法記述で問題となる点をいくつか取り上げ、話者の内省も参考にコーパス調査を行って、帰納的にそれらの問題に関する現状を観察・記述することを目的とする。

コーパスは Mongolian National Corpus (Corpus Technologies が2007年から2009年にかけて開発したウェブコーパスで、総語数は1,160,000語) である。このコーパスでは \*X や X\* と入力して検索することで問題の形式 X の前後に何らかの要素のある形を検索することができる。下記ではこの \*X や X\* のような検索に用いた形式の表記も用いることにする。例が全く得られない場合や極めて少ない場合には補助的に Google 検索も用いた。

コンサルタントの情報は下記のとおりである。なお以下で単に「モンゴル語」という場合には、基本的にモンゴル国のハルハ・モンゴル語を指すものとする。モンゴル語の文例等はキリル文字による正書法からローマ字に翻字して記した。その翻字は次のような方式に拠っている: a=a, б=b, в=v, г=g, д=d, e=je, ё=jo, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, л=l, м=m, н=n, о=o, ө=ö, п=p, р=r, с=s, т=t, у=u, ү=ü, ф=f, х=x, ц=c, ч=č, ш=š, ш=šč, ь=”, ы=y, ь=’, э=e, ю=ju, я=ja。特にことわらない限り, Janhunen (2012) をはじめとする先行研究における表記も基本的に本稿による方式に統一していることに注意されたい(ただし斜字体で記したものは Janhunen (2012) による表記をそのまま示したものである)。なお形態素内の母音が大文字で記されているものは、母音調和による異形態があることを示している。文語形は《》に入れて示す。



本稿の著作権は著者が保持し, クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。  
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed/ja>

表1：コンサルタントの情報

	コンサルタント	生年	出身地
モンゴル国	L氏	1989	Övürxangaj
内モンゴル	H氏	1985	Bajannuur

H氏の母語は内モンゴルにおけるオラド方言であるが、フフホトに在住の経験もあり、人口の多いホルチンをはじめとする方言の話者の話し言葉についても知る限りの情報を提供していただいた。ただし、内モンゴル内部における方言差は大きいと、本稿において内モンゴルでの状況として書かれているものは基本的にオラド方言での状況を反映するものと考えていただきたい。

## 2. 名詞における複数形のゆれ

### ・-d~-s

Janhunen (2012: 100) では「複数標識の -d と -s の間で揺れを示す語幹がある」として noxoj「犬」をあげている。これに対し、話者の内省によれば、モンゴル国では話し言葉でふつうは noxojnuud を使うという。書き言葉では noxod を使うが、noxos もわずかにあるという。内モンゴルでも話し言葉ではふつう《noqai-nuGud》を使うという。《noqad》および《noqas》は書き言葉で用いられることがあり、どちらもその使用は書き言葉としての感じを与えるという。査読の方からの情報によれば、新疆のオイラト方言では noxas、チャハル方言、オールドス方言でも noxojnuud を用いるという。

コーパスで検索してみると、noxod 47 例に対し、noxos および noxojnuud は 0 例であった。

### ・-UUd~-nUUd

Janhunen (2012: 101) では「-nUUd は鼻音要素と連結母音 UU、複数接辞 -d からなる透明な構成となっている」とし、「鼻音要素にはさまざまな由来が考えられる」が、「いわゆる隠れた n を持たない語でも長母音や流音で終わる語幹には -nUUd をとるものがある」として böö-nüüd「シャーマン-PL」、dalaj-nuud「海-PL」、gol-nuud「川-PL」、gar-nuud「手-PL」の例を挙げている。話者の内省によれば、内モンゴルの口語では gar-uud ~ gar-nuud、ger-üüd ~ ger-nüüd「家-PL」、gol-uud ~ gol-nuud の両方を用いるという。この接辞はやはり「母音と子音 n で終わる語に後続する」(清格爾泰 1991: 144) ものとされているため、後者の形はその規則に反した形となっている。なお gar(uud) ~ gar(nuud) の単複の両形には「ヤツ(ら)」や「腕前」のような意味があるという。こうしたゆれを示す語について、モンゴル国の口語でも両方の形を言うが、後者 (n を伴う形式) を使用することが多いようだという。歌などでは前者も現れるという。ただし garuud はもっぱら「ヤツら」のような意味になるため、意味に対立があるという (ただし単数では両方の意味がある)。類推によって -nUUd の形の使用される範囲が広がりつつあるものと考えられる。

コーパスで検索してみると、garuud 1 例・garnuud 0 例、gerüüd 13 例・gernüüd 0 例、goluud 1 例 ~ golnuud 1 例であった。書き言葉であるためか、-nUUd の例はほとんど得られなかった。下記は golnuud が得られた例<sup>1</sup>である。

- (1) Orxon, Selenge, Xöxüjn onc sajxan golnuud,  
「オルホン、セレンゲ、ホフの特別に良い河 (複数) は、」

<sup>1</sup> 査読の方からの御教示によれば、この例は詩の一節で、Orxon, Selenge, Xöxüjn onc sajxan goluud という綴りで引かれることもあるという。

この問題については、さらに *gerees~gernees* 「家から」のような(奪)格変化でのゆれと連動してないかを調べる必要がある。隠れた *n* を持つ語からの類推がどのように働いているかという点について明らかにしていく必要がある。

・ *-čUUd~čUUI*

形容詞や民族名から人間の集団を示す接辞に *-čUUd* があるが、Janhunen (2012: 101) では「自由に交替する異形態 *-čUUI* をもち、この場合 1 にはもはや複数の機能はない。*-čUUd~čUUI* のゆれはおそらく方言的および個人的な嗜好における違いを含んでいる」としている。話者の内省によれば、モンゴル国・内モンゴル共に *-čUUd* を使うが、モンゴル国ではたしかに特に意識せず両方の形式を用いている話者もいるという。両形式の間に意味の違いは感じられないという。内モンゴルの文語表記ではどちらの形でも書くが、モンゴル国のキリル文字表記では *-čUUI* で話していても、書く時にはもっぱら *-čUUd* と書くという。

しかしコーパスで検索してみると、下記のような結果となった(各複数接辞をとっていた語幹およびその数も示した、ただし *-čUud*, *-cüüd* は例が多かったため 50 例までを分析し、1 例だったものは省略した)。頻度はより少ないものの *-čUUI* も現れる。それぞれをとる語幹は重複しているものの、やや違いも観察される。*mongolčUud* 「モンゴル人たち」と *zaluučUud* 「若者たち」はもっぱら *-čUud* をとって現れているが、これはこの 2 つの語が 1 を含んでいるため、異化が働いているのではないだろうか。ただし民族名にはもっぱら *-čUUd* のみがつく、という規則によるものかもしれない(査読者からの御教示による)。*-čUUI* の用いられる語彙の方がやはりより口語的で平易な語彙であることも観察できる。

*-čUud* 266 例: *mongolčUud* 「モンゴル人たち」 19, *zaluučUud* 「若者たち」 10, *bagačUud* 「子供たち、若者たち」 7, *tomčUud* 「大人たち」 3, *bajačUud* 「金持ちたち」 3, *xarčUud* 「平民、民衆」 2

*-cüüd* 159 例: *emegtejčüüd* 「女性たち」 18, *erčüüd* 「男たち」 11, *büsgüjčüüd* 「女たち」 8, *eregtejčüüd* 「男性たち」 5

*-čUul* 44 例: *bagačUul* 「子供たち、若者たち」 14, *xarčUul* 「平民、民衆」 11, *tomčUul* 「大人たち」 6, *nastajčUul* 「老人たち」 2, *avgajčUul* 「婦人たち」 2

*-cüül* 34 例: *ercüül* 「男たち」 13, *büsgüjčüül* 「女たち」 11, *övgöcüül* 「祖先たち」 3, *xögsčüül* 「老人たち」 3, *emegtejčüül* 「女性たち」 2

### 3. 格の形式におけるゆれ

・ *nomd~nomond*

モンゴル語にはいわゆる「隠れた *n*」を持つ語と持たない語があり、「隠れた *n*」を持つ語では一部の格接辞がつく際に *n* を伴った語幹が用いられる。Janhunen (2012: 112) によれば *nom* 「本」の与格形は *nomd* となっているが、*nomond* も同じくらい良く使われるという。この語 (*nom* 「本」) は本来隠れた *n* を持たないはずの語である。コーパスで検索してみると確かにどちらの形も得られる (*nomd* 18 例, *nomond* 7 例)。2 例ずつ例も挙げておく。特に意味や文体などの違いは観察されない。

(2) Erdem **nomd** xičeengüjlen surcgaax n' čuxal.

「学問においては熱心に勉強することが重要だ。」

(3) Medeež ter **nomd** ene zun nadad dursgasan činij zurag xevlegdene.

「もちろんその本にはこの夏に私の記念になったあなたの写真が掲載される。」

(4) Ene žildee xičeel **nomond** n' tusal!

「今年は(あの人の)勉強を手伝って。」

- (5) **Ginnesijn nomond orox jum ...**  
「ギネスブックに載っているものだ、」

• **utaanaar~utaagaar, casaar~casnaar**

一方、長母音や二重母音で終わる語に道具格 -AAr が付く場合には、挿入子音の g が現れる。Janhunen (2012: 112) によれば **utaanaar** 「煙で (with smoke)」 vs. **utaagaar** 「煙で (through smoke)」 のような違いがあるという。したがって「煙で蚊を追い払う」のような場合には **utaanaar**、「(火事などで) 煙の中を通過して行く」のような場合には **utaagaar** の方を使うと考えられる。しかし話者に訊くと Janhunen (2012: 112) とは逆の判断であった。**cas** 「雪」でも同様に (**casaar ~ casnaar**)、普通の語幹扱いは「道具」、隠れた n 語幹扱いは「状況」「場所」のように感じられるという。**utaa(n)** 「煙」、**cas(an)** 「雪」は共に本来的には隠れた n を持つ名詞とみなされている。コーパスからは次のような例が得られたが、下記の例から判断する限りでは話者の内省の方が当てはまっているようである。

**utaagaar** (検索の結果 1 例のみ)

- (6) **Tüünij orž irseer tödijlön ix udaaguj bajxad bjacxan bajšin n' tamxiny utaagaar düürč,**  
「彼が入ってきて間もなく、小さな家はタバコの煙で満たされ、」

**utaanaar** (検索の結果 1 例のみ)

- (7) **Olgojdox utaanaar caj xanxalna.**  
「沸きだした煙でお茶の香りが漂う。」

**casaar** (検索の結果は 6 例得られた、以下に 2 例を示す)

- (8) **Casaar urlasan züüd bajsan jum**  
「雪で作られた夢だったのだ。」
- (9) **Xojoul, galaa casaar darž untraagaad**  
「二人で、自分の火を雪で圧して消して」

**casnaar** (検索の結果は 4 例得られた、以下に 2 例を示す)

- (10) **Namryn ene dulaan casnaar bajtugaj övlijn tasxijm xüjtend daaramgüj ...**  
「秋のこの暖かい雪の中はもちろんのこと、冬の厳しい寒さに凍えることなく、」
- (11) **Türüüčijn casnaar bi nutagtaa očson bajv.**  
「最初の雪の時に私は故郷に戻ったのだった。」

#### 4. 実詞化 -x の複数形

話者によればモンゴル国では次のような使い分け (ただし複数の方は -An がなくてもよい) が一応あるという。したがってこの対立は Janhunen (2012: 116) の言うように実詞化 -x のついた形における単複の対立といえるようである。

- (12)a. **Bii xödöönijx.**  
「私は田舎出身の者だ。」
- (12)b. **Bid xödöönijx(ön).**  
「私たちは田舎出身の者だ。」

一方、内モンゴル出身の話者は (12)b. でも *-en* が付いた形は言えないという。したがって単複の対立とは意識されていないようだ。

そこでコーパスで *-nijxAn* (属格-*x-PL*) の形で検索してみたところ、下記のような 34 例を得た。したがってモンゴル国では確かに使われていることがわかる。

*-nijxan*: *Nijslel Adenijxan* 「首都アデンの人々」 1

*-nijxen*: *xüreenijxen* 「サークルの人たち」 9, *tednijxen* 「それらの者たち」 4, *günijxen* 「公爵の人たち」 4, *ednijxen* 「これらの者たち」 4, *xüčnijxen* 「治安維持の組織」 2, *gegeenijxen* 「聖人たち」 1

*-nijxon*: *odoonijxon* 「今日の人々」 1

*-nijxön*: *örtöönijxön* 「駅の人々」 4, *xödöönijxön* 「地方の人々」 3, *xödölgöönijxön* 「運動のメンバーたち」 1

## 5. 場所(名)詞の変種

*dotoo* ~ *dotno* ~ *dotor* ‘inside, among’ 「中」

*gadaa* ~ *gadna* ~ *gadar* ‘outside’ 「外」

上記の3者の違いについて、Janhunen (2012: 122) は、3者の相互間の意味はほとんど変わらず、方言によってどの形を好むかが違う、としている。しかし話者によれば、実際には意味に違いがあるようだ。このうち *dotoo* だけはあまり使われないという。ただし *gadaad dotood* とセットで使われることはあるという。ここではまず小沢 (1983) の記述を整理しておく(文語表記も小沢 (1983) による)。

*dotood* (*dotoo* では立項なし) 《*dotuGadu*》[形] 中の、内部の

*dotno* 《*dotuna*》[形] 内(部の)、中の; 親しい、親愛なる

*dotor* 《*dotur*》[名・形・後] 中(の)、内(の)、内臓の、内部(側)の、裏、裏地; 心の中; ...の中

*gadaa* 《*GadaGa*》[形・副・後] 外に(の)、...の外に; 外側に(の)

*gadaad* 《*GadaGadu*》[形] 外の、外国の

*gadna* 《*Gadana*》[副・後] 外に(で); ...の他に

*gadar* 《*GadaGur*》[名・形] 外側(の)、外面(の)、外部(の)

清格尔泰 (1991: 210-213) では場所名詞(清格尔泰 (1991) では「時位詞」)を表にして整理しているが、「内、里」について《*dotor-a*》(*dotor*)を名詞型時位詞・時位、《*dotoyadu*》(*dotood*)を形容詞型時位詞・部位、「外」について《*yadan-a*》(*gadna*)を名詞型時位詞・時位、《*yadayadu*》を形容詞型時位詞・部位、として位置づけている。なお内モンゴルの話者によれば、*dotno* には文語の形式に異なる2つの形式が対応し、それは《*dotono*》が「親愛なる」と《*doton\_a*》「中」であるという(ただしほとんど使われない、使うとすれば《*gadan\_a doton\_a*》「外と内」、《*gerijn doton\_a*》「家の外」のような表現で使うぐらいであろうという)

以上を踏まえてコーパスで検索してみたところ結果は次のようであった(数字は例の数である)。まず *dotoo(d)* / *dotno* / *dotor* についてみる。

*dotoo* 0, *dotoo*\* 82 (*dotood* 60, *dotoodyn* 11, *dotoodyg* 6, *dotoodod* 3, *dotooddo* 2, *dotooz* / 「パンツ(女性の); ズボン」(小沢 (1983: 137))

まず *dotood* に関しては、話者の内省にあったように、*gadaad (ba) dotood(-yn/-od)* の形で現れているものが11例、*dotood gadaad(-yn)* の形で現れているものが2例と、*gadaad* との組み合わせで用いられているものが1/6強あった。組み合わせの例とそうでない例を1例ずつ挙げておく。いずれも名詞的(もし

くは修飾語的(14) に用いられているようだ。

- (13) Xüüxnijg **gadaad** ba **dotoodod** n' xürtel xanatal ažiḡlaad,  
「女の子をその外側と内側まで飽きるまで観察して、」
- (14) **dotood** ajuulgüj bajdal gedgijg nuxactajgaar avč üzex cag bolžee.  
「内部の安全を真剣に考える時になったようだ。」

dotno は 115 例あった。dotno に後続するのは baj- 「いる、ある」、uulz- 「会う」、jav- 「行く」、sanagd- 「思われる」、tanilc- 「知り合う」、najz 「友達」、bol- 「なる」、nöxör 「親友、仲間」、xün 「人」であり、dotno に先行している語は ojr 「近い」、xuučín 「古い、旧知の」、xamgijn 「一番の」、xojoj 「二人の」などであり、dotno はもっぱら「親しい、親しい者」の意で使われていることがわかる。

dotor は 923 例あり、その大部分は後置詞としての用例である。

次に gadaa / gadaad / gadna / gadar についてみる。

gadaa 277, gadaa\* 223(gadaad 88, gadaadyn 62, gadaadad 28, gadaax 13, gadaadaas 7, gadaalž 5, gadaalax 3, gadaagüj 3, gadaagaa 2, gadaadynxan 2, gadaadynxand 2, gadaadtaj 1, gadaalaxaar 1, gadaadžsan 1, gadaag 1, gadaanaa 1, gadaaduud 1, gadaany 1)

gadaa はこのように対格 (gadaag) や属格 (gadaany)、再帰 (gadaagaa) を取って名詞的に機能している例が見出される。gadaad も奪格 (gadaadaas)、共格 (gadaadtaj) を取った例を示している。いずれの形式も名詞的に用いられていることがわかる。他方、gadaadad は gadaa が与格を取ったものと考えられるが、gadaad は gadaa が与格を取ったものか、gadaad であるのか、形の上からは判断がつかない。今後使用例を吟味して研究していく必要がある。

gadna は 272 例あり、その多くは後置詞的な用法である。

一方 gadar は 4 例しかヒットしなかった。いずれも文語的な表現である。以下に全例をあげる。gadar\* は 66 例あったが、そのうち gadarla\* が 58 例で、これは gadarlax 「(外面・表面を) おおう；縁縫いする；外装する」(小沢 (1991: 88)) の例であると考えられる。

- (15) Xurdañ xölgijn **gadar** dotor büx šinž bürdsen sergelen sajaxan am'tan bajna.  
「速い駿馬の、**外側**内側全ての特性が完成された元気で賢い動物であった。」
- (16) Bilgijn toolol iñxüü žil neg büreer n' ažin **gadar** carajg tanixaas gadna,  
「太陰暦はこのようにして毎年**外**の様子を認識することに加えて、」
- (17) tögöldör xuuryn gjaltganax **gadar** deer nulimsaa unagan gašuudax n' eleg emtrem.  
「ピアノのきらびやかな**表面**に涙を落して悲しむのは愛に苦しむことだ。」
- (18) Agaar xatuu, **gadar** xüjten, mönxijn.  
「空気は硬く、**外**は冷たく、永遠の。」

以上に見てきたように Janhunen (2012: 122) は 3 者の相互間の意味はほとんど変わらないとしていたが、それぞれの系列における 3 つの形式はかなり異なった機能で使い分けられていることがわかった。さらに「中、内」の dotoo(d) / dotno / dotor と、「外」の gadaa / gadaad / gadna / gadar の両系列は形と機能、頻度が対応していないことも明らかになった。

## 6. 数詞におけるゆれ

Janhunen (2012: 125) によれば、2 以外の数詞は皆不安定な n (隠れた n) を持っているという。モンゴ

ル国の話者によれば、口語では類推によって *xojorn-* (一部の格がとる語幹の形)「2」も現れるが、一般の名詞の数を示す際には用いられず、「(X 月) 2 日/12 日/22 日」を言う時にだけ現れるという。内モンゴルの話者によれば内モンゴルではさらに火曜日をいう時にも現れるという。

コーパスで *xojorn\** を検索したところ、3 例のみ例があった：*Šinijn xojorny ödör*「三が日の二日目」、*Arvan xojordugaar saryn xorin xojornyxoos*「12 月の 22 日から」、*Šinijn xojorny saryg*「新年の 2 ヶ月目を」。したがってこのゆれに関しては上記の話者の内省のとおりであると考えられる。

Janhunen (2012: 127) によれば、*zurgaadugaar / zurgadugaar*「6 番目」と *doloodugaar / doldugaar*「7 番目」には 2 通りの形がある。モンゴル国の話者によればどちらもよく使うが、話者によっても使用頻度に違いがあるという。

コーパスで検索してみると、*zurgaa dugaar* は、このように離して書いた 1 例のみがヒットし、*zurgadugaar* は 18 例であった。*doloodugaar* は 1 例のみで *doldugaar* は 15 例あった。少なくとも文語ではより短い形の方が好まれていることがわかる。

話者の内省によれば、さらに *guravdugaar*「3 番目」、*dörövdügeer*「4 番目」にも文語の場合に使われるより短い形 (*gutgaar, dötgeer*) があるという。これらを検索したが、*gutgaar* は 1 例のみで、*dötgeer* の例は得られなかった。

Janhunen (2012: 128) では回数数詞形 (multiplicatives) を *-t* としているが、話者によればこの要素は *-taa/-tee/-too* にしないと使えず、この *-AA* は (文語表記を見る限り) 再帰起源のものではないという。しかしコーパスで *gurvant*「3 回」を検索すると 2 例得られた。他方 *gurvantaa* は 24 例あった。

(19) *Tegž bajtal deegüür n' xon xeree gaag, gaag, gaag gež gurvant gaaglan nisež öngörsönd,*  
「そうしているうちに (何かの) 上をカラスがガーク、ガーク、ガークと 3 回啼いて飛んで行った時に、」

(20) *Čoo čoo čoo gež öndör duugaar gurvant xašgiran gedreg ergež xaralgüj,*  
「チョーチョーチョーと大声で 3 回叫んで振り返らずに、」

これらの例で *-t* に終わる語形は副詞的に用いられていることがわかる。

## 7. 指示代名詞・人称代名詞・再帰代名詞におけるゆれなど

話者によれば、Janhunen (2012: 130) における表 30 の沿格形 *eneegüür, tereegüür* は母音が逆で、*enüügeer, terüügeer* と言うという。これについてコーパスで検索すると、*eneegüür, tereegüür* の例はなく、*enüügeer* 9 例、*terüügeer* 6 例のみが得られた。Google で検索すると、*eneegüür* 約 280 件、*tereegüür* 約 365 件；*enüügeer* 約 112,000 件、*terüügeer* 約 76,000 件であった (2022 年 3 月 1 日時点)。*eneegüür* と *tereegüür* が用いられているのは、ほとんどがブリヤート語によるものようだ (前後にはブリヤート語に存在する *h* の音素の表記がみられる)。したがって Janhunen (2012: 130) の示す語形は現在のモンゴル国におけるハルハ・モンゴル語で用いられている形とは違っているということになる。

Janhunen (2012: 134) では現代モンゴル語 (proper) の諸方言における 1 人称単数代名詞の語幹では *nad-* が優勢であるが、*nam-* も使われており、特に対格では *namajg* が使われるとしている。モンゴル国の話者によればこの 1 人称単数対格形についてモンゴル国では *namajg* が規範形とされているようで、*nadyg* は子供が言うのを耳にするが、口語的な感じがするという。コーパスによる検索では *nadyg* は 0 例であった。Google による検索では *namajg* 約 5,920,000 件、*nadyg* 約 14,400 件であった。内モンゴルの話者によれば内モンゴルでは *nam-* 語幹と *nad-* 語幹は半々ぐらい使われている気がするが、その地域はわからないという。

Janhunen (2012: 134-135) によれば、現在 1 人称複数形として使われているかつての 1 人称複数包括形

には *bid* (<\*bi-de) ~ *bjad* (<\*bi-da) のゆれが観察されるという。モンゴル国の話者によればモンゴル国では時代劇などでよく *bjad* が聞かれるという。内モンゴルの話者によれば内モンゴルでは西の方ほど *bjad*、東の方ほど *bid* であるように感じられるという。コーパスで検索してみたが、ヒットした 3 例の *bjad* はいずれも「体格の良い、力の強い」を意味する別の語であり、人称代名詞 *bjad* の例は得られなかった。

2 人称複数形について、Janhunen (2012: 135) は *tad-ner* という形を方言的に使われるととしてあげるが、話者によればモンゴル国ではこのような形は聞かないという。内モンゴルの方言では *tadan* は聞くという。コーパスでは *tadnar* は 0 例で、Google でも検索してみたがヒットした語形はもっぱらカルムイク語の語形であった。

ふつう再帰形の名詞は対格なしでも目的語として機能するが、話者によれば *öör* 「自分」の場合、単に *ööröö* では「自分で」の意味になってしまうため、対格形にさらに再帰のついた *öörjgöö* 「自分を」が使われるという。コーパスで検索してみても 275 例ヒットする。

## 8. 欠格付き名詞からの動詞派生形

Janhunen (2012: 145) があげる *azilgüjd-ex* 「仕事が全くなくなる」という語は、内モンゴルの話者によれば内モンゴルでは一語としては使われず、文語でも使われないという。モンゴル国の話者によれば、モンゴル国では一語で書かれ、文語でも使われるという。母音調和も語中で崩れているという。

*azilgüjd\** で検索したところ、*Azilgüjdee ingež javaa biš* 「やることがないからといってここにいるわけではない。」(*azil-güj-d-ee* 仕事-欠格-与位格-再帰) が 1 例、*azilgüjdljn* 「失業の」(*azil-güj-dl-ijn* 仕事-欠格-出動名詞派生-属格) が 2 例ヒットした。これらは動詞ではないが、やはり母音調和の崩れた語形が生じていることがわかる。

## 9. 受動態

Janhunen (2012: 148) によれば、ソノラントの子音などを語幹末に持つ動詞では、受動態の接辞は *-d/-t* となる。このように不規則な形を示す動詞を Janhunen は 6 つ挙げているが、山越 (2012: 249-250) は 8 つ挙げている。うち 5 つは共通している。

山越 (2012) のみがあげているもの : *gar-* 「出る」, *xür-* 「至る」, *duul-* 「聞く」

共にあげているもの : *av-* 「取る」, *xuur-* 「騙す」, *dijl-* 「勝つ」, *ol-* 「得る」, *sons-* 「聞く」

Janhunen (2012) のみがあげているもの : *ög-* 「与える」

*av-* は *avtagd-* という形も使われる。すなわち二重の受身形である (小沢 (1983: 5))。 *ög-* では *ögt-* だけでなく、*ögögd-* も使われ、むしろ塩谷 (2006) によれば *ögt-* は廃語、使われない語形となっているという。

そこでコーパスにより *ögt\** を検索したところ 9 例ヒットしたが、*ögtügej* 5 例、*ögtöl* 3 例 *ögtööž* 1 例で、受動の語幹 *ögt-* のはっきりした例は得られなかった。 *ögögd\** でも 1 例のみで、次の例における *ögögdxüün* は「データ」の意であるようだ。

(21) *edijn zasgijn ögögdxüüneer xemžixijn ner biš geed bajx jum.*

「経済データによって測定される名称ではないというのだ。」

Janhunen (2012: 148) によれば、自動詞から受身になる動詞が 2 つある : *jav->javagd-* 「行われる」、*gar->gart-* 「越える」。このうち *javagd\** をコーパスで検索してみると、実際に 23 件ヒットすることがわかる。



## 10. 懐疑法 -UUzaj ~ UUj

Janhunen (2012: 155) が懐疑法 (dubitative) と呼んでいる -UUzaj ~ UUj という modal marker がある。この形式の使用実態を探るため、\*uuzaj で検索したところ、29 件、\*üüzej で検索したところ 4 件のヒットがあった。ただし zuuzaj 「手のひら」「馬銜 (はみ)」「靴の後部につける固い革」が 9 例含まれていた。残りの例の動詞語幹は次のようであった。

bol- 「なる」8 例、dajr- 「攻撃する、侵入する」、al- 「殺す」、san- 「思う、考える」、av- 「取る」、ald-, ald-čix- 「失う」、cavči- 「(刃物で) ものを打つ、きる」、tos- 「手で受ける、迎える」、mart- 「忘れる」、avt- 「取られる、取れる」、guagl- 「カラスが啼く、カエルが鳴く」、bod- 「考える」、töör- 「迷う、困惑する」、ersd- 「危険を受ける」、öngör- 「過ぎる、死ぬ」、ünemši- 「信ずる」

dajr- 「攻撃する、侵入する」、al- 「殺す」、ald-, ald-čix- 「失う」、cavči- 「(刃物で) ものを打つ、きる」、mart- 「忘れる」、töör- 「迷う、困惑する」、ersd- 「危険を受ける」のように、望ましくない結果を招く意味の動詞が多くみられることがわかる。もっとも例の多かった bol- も、さらにその前に形動詞もしくはその否定形をとっているものが 7 例あった。

(22) setgel algasangüj boluuzaj. 「心配なことが起きたら困るな。／浮かれないように気をつけて。」

(23) ax düü naryn nutagt očix boluuzaj. 「兄弟の故郷に行ったら困るな。／兄弟の故郷に行かないように (気をつけて)。」

## 11. 可能法 -mz

Janhunen (2012: 156) は可能法 (potential mood) として -mz という形式を示している。モンゴル国の話者によれば、例えば oč-o-mz 「行くからね」、ide-mz 「(置いといて、そのうち) 食べるから」のように使うが、この表現は上からの立場からの発言という感じを伴うという。例えば oč-o-mz であれば「行くので (待っていてくれ)」のような聞き手への何らかの影響を含意するという。

\*mz で検索したところ、コーパスから 12 例を得た。以下に全例を示す。うち 4 例には補助動詞である ög- 「あげる、くれる」についていた ((25), (28), (31), (33))。この補助動詞を伴うことによって、たしかに上の立場からの恩着せがましい表現を形成しているようだ。内モンゴルの話者によれば、内モンゴルでは -mz は動詞から名詞を作る派生接辞として働き、この接辞の付いた語は名詞として用いられ、可能法の意味を示す述語としての用法はないという。

(24) Oroj tijšee baraag čin' neg xaraad avamz, 「夕方頃にあなたの姿を見ておくから、」

(25) Bүx usyg n' jüüleed ögömz, 「全ての水を注いでやるから、」

(26) od garag erxšeevel zuramz. 「星が惑星を支配しているなら (天のお告げが降りれば)、描くよ。」

(27) Zүgeer, zүgeer bajznaž bajgaad neg ajaga uumz. 「大丈夫、大丈夫、しばらくしてから (お茶を) 一杯飲もう。」

(28) Tanaj Xanxyn zurgijg zuruulž ögömz. 「あなたのハンフ (地名) の絵を描いてあげるからね。」

(29) Mөd uulzamz. 「近いうちに会いましょう。」

(30) bi үүнij čin' tany ömnöös xajrlan xamgaalaxyg bodomz! 「私はこれをあなたの代わりに守っていくよ！」

(31) bi čamd jar'ž ögömz gesen jum. 「私は君に話してあげるよと言ったんだ」

(32) -Za bi čamd oroj jarimz. 「じゃあ私は君に夕方話すよ」

(33) -Za süüleer xelž ögömz. 「じゃあ後で言ってあげるよ。」

(34) Bi ajaar taaraldaxdaa xelemz gev. 「私は後であった時に教えるよと言った。」

(35) Tus xүргеž čadax xүн nojon Monarjelaas öör bajxgүj gež xelemz. 「助けることのできる人はモナレル氏以外にはいないと言うから。」

## 12. magadgüj に先行する動詞の形態

Janhunen (2012: 268-269) は節全体を修飾する要素 (clausal modifier) の中で法的名詞類 (modalnominals) を取り上げている。xeregtej 「～すべきだ、～する必要がある」など、こうした要素はもっぱら形動詞に後続する。ところが magadgüj 「～かもしれない」は未完了副動詞 -ž に後続する。しかし形動詞 -x にも後続するとし、意味は同じとみているようである。

irex magadgüj                    = irž magadgüj

‘He will perhaps come.’    ‘He will perhaps come.’ (Janhunen (2012: 269))

しかしモンゴル国の話者によれば、形動詞に後続することはまれであるという。一方内モンゴルの話者によれば、内モンゴルでは形動詞に後続する方が一般的で、未完了副動詞に後続する形式を用いると、「来てしまうんじゃないか、来ちゃうかもしれない」というような心配のニュアンスが加わるように感じられるという。さらに、完了形動詞に後続する V-sen magadgüj は内モンゴルでは言えるが、モンゴル国では言えないという。

Janhunen (2012: 268-269) が指摘するように、magadgüj の前の位置には =č だけが挿入可能である。しかし (モンゴル国・内モンゴル両方の) 話者によれば xeregtej の前には挿入できないので、両者は違う構造である可能性がある。したがってこの -ž が歴史的には副動詞ではなく定動詞の-žee に遡る可能性もあるのではないだろうか。

以上の状況を踏まえてコーパスで magadgüj を検索したところ 203 例のヒットがあった。このうちの先頭から 100 例を調査し、magadgüj に先行する形式を分類してみた。まず単独で文頭にたち「もしかしたら」のような意味を実現するものが 17 例あり、これと類似したものだが、magadgüj の前で節が切れて、次の文全体に掛かる例が 5 例あった。

これらを除くと、67 例は -ž/-č に後続していたが、-x に後続した例も 9 例あった。他方 -sAn に後続した例はなかった。見かけ上、その他の形式に後続しているように見える例も 2 例あったが、これは動詞の省略と考えられる例であった。

-x に後続していた 9 例について、これを副動詞 -ž/-č に替えても問題がないかを、(内モンゴルの話者にとっては -x に後続するのが一般的なため) モンゴル国の話者に訊いたところ、下記の 2 例を除き問題がないとのことであった。したがって機能における違いはないものと思われる。

(37) Orxiod dutaax n' magadgüj bišüü.

「おそらくそうではありません。」

(38) Ter emgen šinijn xojorynxoo ödör irex n' magadgüj bajsan bolovč Baldanceren Bogdod baraalxaxaa čuxalčlav.

「その老婆は新年の二日目に来たのかもしれませんが、バルダンツェレン (人名) はボグド・ハーエンに謁見することを主張しました。」

この 2 例に共通している点は magadgüj に先行する形動詞が 3 人称の小辞 n' によってとりたてられている点である。話者によれば n' がなければ副動詞に替えても問題はないという。したがって n' の存在は magadgüj に先行する形式の選択に影響を及ぼすことがわかる。他方、=č があっても副動詞に替えることは問題がないという。

(39) Tüüxij cus üldsen bajx č magadgüj gež zövlöv.

「生の血液が残っている可能性がある」と忠告した。」

参考文献

- Janhunen, J. (2012) *Mongolian*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.  
小沢重男 (1983) 『現代モンゴル語辞典』 東京：大学書林  
清格尔泰 (1991) 『蒙古語语法』 呼和浩特：内蒙古人民出版社  
塩谷茂樹 (2006) 『モンゴル語ハルハ方言における派生接尾辞の研究』 大阪外国語大学学術研究双書 35  
山越康裕 (2012) 『詳しくわかるモンゴル語文法』 東京：白水社

執筆者連絡先：kazamas@tufs.ac.jp

原稿受理：2021年12月31日